

『由利本荘市郷土資料館に掲示されているごてんまりの歴史』

本荘に古くから伝わる手まりには、石沢鮎瀬にある広田庵の尼僧 木妙尼が鮎瀬の村娘に伝えた「かけまり」があり、豊島スエノさん（明治21年1888鮎瀬生まれ）がこの手法を受け継いでいました。

一方、市内後町の料亭「甚能亭」（じんのうてい）で働いていた斉藤ユキノ（旧名 田村正子）さんと児玉八重子さんは昭和34年（1959）頃、日役町蔵堅寺（ぞうげんじ）にあった古い手まりから、その製作技法を復元することに成功しました。

偶然にも豊島スエノさんの娘の大門トミエさんも甚能亭で働いており、石沢と後町の手まりが会うことになりました。

やがて、斉藤さんらの作った手まりは秋田市の「田中企業」が買い取ってお土産品として売られることになりましたが、「せっかく本荘の人たちが作っているのだから“本荘ごてんまり”としたらどうか」ということで「本荘ごてんまり」の名前が誕生しました。

昭和36年（1961）の秋田国体の際には、豊島さん、斉藤さん、小松コノエさんらが、本荘に宿泊していた国体選手に手まりを記念品として贈り、この時、選手によって持ち帰られた「本荘ごてんまり」が全国にその名を知られるきっかけとなりました。

最初の頃、手まりの芯はゼンマイの綿を丸めて木綿糸をまき、絹糸や毛糸をまき、絹糸や毛糸などで模様を刺していました。豊島スエノさんが伝えていた「かけまり」は「糸かけまり」のことと思われます。

又、斉藤ユキノさんが蔵堅寺で見た「手まり」は、糸のかけ方が雑で中のゼンマイが見えており、針で糸を寄せながらまりの作り方を復元したといえます。

苦労の結果、復活させた「本荘ごてんまり」は大変好評であったため、安定した内職を目指して手まりの商品化が模索されました。たとえば、入手が困難なゼンマイ綿をもみ殻にかえ、刺繍糸を色鮮やかなリリアンにし、まりの三方に房をつけるなど伝統と美を生かしながら安価で大量生産のできる製作方法が考案されました。

古くから伝わる手まりの模様には「菊」「十時手裏剣」「狐の迷い道」などがあり、今も本荘ごてんまりの基本模様となっています。

その後、本荘市の商工課や秋田県の内職指導所の後押しがあり、ごてんまり作りは、主婦の内職として本荘の町部や石沢地区を中心に広がっていきました。昭和45年（1970）には本荘市内の内職者の67.5%がごてんまり作りに従事していたほどです。

しかし、昭和50年（1975）のオイルショックを経て、その後の弱電メーカーの内職、パート労働者の雇用増加などにより、ごてんまり作りの内職者は激減してしまい、残る制作者も高齢化が心配されているところです。

しかし、一方で趣味の御殿まり作りは若い世代にも広がっています。まりは無限の創作の可能性を秘めた民芸品であり、斎藤民芸店や水林の阿部とし子さんなどが各地で講習会を開いて普及に努めています。

また、小・中学校の子供たちが本荘の伝統工芸品としてごてんまりを習う機会も多くなり、若い世代が今後、どのように本荘ごてんまりと関わっていくのが注目されるところです。